
ディタッチメント

パペポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディタツチメント

【Nコード】

N6789C

【作者名】

パペポ

【あらすじ】

極端に無関心な少年が、世界を救うべく奮闘する。そんな珍奇な物語を、悪魔様は所望のご様子だ。9/15(土)：小説公開

『無関心な少年』

「お前はあくまで無関心を貫くというのか」

ええ、そうです、と少年は言った。

「見ての通り、地球に危機が迫っている。このまま座していれば、地球は確実に粉々だ。そしてそれを救えるのは、恐らくお前だけだ」
ふーん、そうですか、と少年は完全に上の空だ。

「それでもお前は、その危機に立ち向かおうとはしないのか」
はい、どうでもいいので、と最後に少年は答えた。

驚愕に目を見開く大男を尻目に、少年はその場を去っていく。
「地球が滅ぼうがどうしようが、どうでもいいじゃないか、そんなこと」

極端に、無関心な少年がいた。

平日の朝。学生は学校へ登校する。

何故？ かなんて言うまでもない。毎日の習慣として、誰もがすることだからだ。誰もがすることをしてしない人間は、社会的に村八部にされる。そうならない為にも、学校に通うことは必要なことなのだ。

勿論、他にももつともらしい理由はあるだろう。将来の為の学力をつけるとか、コミュニケーション能力を醸成させるとか、色々ある。しかし、学生達が毎日そんなことを考えながら学校に通っているのかというと、答えは否だ。大部分の者は、「皆がやってるからだとか、「当たり前のことだから」などと、自己主張の欠如した解答をするだろう。彼らは別に、この学校に行くという行為について、特に何か考えながら登校しているワケではないのだ。

理由や目的なんてどうだっていい。学校に行くという行為は、学

生身分に課せられたただの義務なのだ。義務に不満があれば勝手に放棄すればいいし、不満が無ければそのまま義務を果たせばいい。

ただ、それだけの話なのだ。

そんなな目的意識の無い学生達の中に、その少年はいた。

たきかわひろし
滝川弘志。地元の高校に通う、十六歳。丸メガネをかけた、地味で子供っぽい外見の少年だ。

少年は無関心な人間だった。この世のあらゆる平凡な事象を、冷めた目で退屈そうに眺めている。どこかで事件があったとしても、何ら興味を示さない。身近でトラブルがあったとしても、彼は無関心を貫くのだ。

つい先日も、近所で放火騒ぎがあったのだが、少年はそれに見向きもしなかった。放火なんていかにも物騒な話である。それが近所であったとくれば、普通の神経の人間なら怯えるか警戒したりするだろう。しかし、少年にはそういう感情が全く沸かないのだ。

放火？ 近所で？ あそう、そうなの。で、だから何？

世にはびこる情報の類も、右耳から入って左耳から抜けていく。その情報が必要か必要かなんて考える意味もない。あらゆる情報は、彼にとっては本当にどうでもいいことなのだ。仮に、あなたは明日死にますと医者に告げられても、少年は平静でいられるだろう。「そんなことは、どうでもいいことだ」などと言って、医者を大いに驚かせるに違いない。

彼はそういう人間だった。

だが、少年は別にこの世の事象を拒絶しているのではない。あくまで、関心を持たないだけであった。

だから彼は、学校に行くというこの行為をどうでもいいと思いつつも、不登校になるワケではなかった。彼もまた他の人間と同様、毎日学校に登校していた。

この日もそうだった。朝の七時半に家を出て、自転車を気だるそうにこぎつつ、少年は学校に向かう。理由や目的なんてない、そんなことはどうだっていい。

行くから行く、ただそれだけだ。

「よお」

弘志が交差点で信号待ちをしていると、横から一人の少年が話しかけてきた。

「おはよう弘志。自転車登校とはいいいご身分だな、おい」

皮肉めいた口調でそういう少年は、弘志のクラスメートだった。

樋川雄二^{ひかわゆうじ}。中身・外見共にパツとしない男である。性格はお調子者で面倒臭がりや。疲れるのは嫌だ、という理由で部活にも入っていない。成績はボーダーラインぎりぎりを浮上する程度のもので、とにかく総合的に見ても冴えない人物だった。

「こちとら歩きで登校せにやらんつてのに、お前はいいよなホント。あー暑いしだりい」

雄二はげんなりとした表情で悪態をつく。確かに、今日は暑い日だった。夏真つ盛りのこの日は気温三十七度。照り付ける太陽が、地上をサウナのように蒸し暑くしている。

「自転車盗まれたんだっけ？」

どうでもよさそうな口調で、弘志は呟く。見た目のガキっぽさとは裏腹に声はすっかり声変わりしている。寧ろ、どことなく威厳があるくらいだった。

「ちやう、壊されたんだよ。バラバラにコワサレタのさ。ちゃんとマンションの駐輪場に停めてたつてのに、昨日の登校時に見た時は原形すら留めてなかった。周りの自転車も皆似たようなことになってたよ。どうやったらあんな風に壊れるんだろつな。ありや相当悪質な野郎の仕業だぜ。まあ防犯カメラには映ってただろつから犯人は捕まるだろつが……あークソ、それにしても暑い。一体誰がやりやがったんだろつなクソクソ」

クソクソ言いながら、物欲しそうに弘志の自転車を眺める雄二。暑い日に延々と歩き続けるのはさぞかし辛いだろつ。自転車でびゅんびゅんと風を浴びることが出来たらどんなに気持ちがいいことか

「あつ、つておい、ちょっと待てよ」

信号が青になったので渡りかけた弘志を、雄二は止める。弘志は気にも止めず先に進もうとするが、雄二が肩を掴んできたので仕方なくブレーキをかけた。

「ご愁傷様としか言いようがないね」

くるりと振り向きそう言う弘志は、何とも形容しがたい無関心な表情をしていた。その無関心な表情で、無関心そうに言葉を発する。「でもさ雄二、そんなこと俺とは関係がないだろうよ。俺がお前の自転車を壊したワケではないし、間接的にでも関わっていたワケでもない。俺は無関係者だ。同情はするが、あくまで関係ないのさ。

であるからして、俺はお前に付き合っただけのんびり行く気も無いし、お前にこの席を譲るつもりもない。なんせ暑いんだ。猛暑だよ猛暑。体に悪いことこの上ない。だから、俺は先に行かせて貰うよ。自転車をこぐ分には、風の影響で少しは涼しいからね」

饒舌にそれだけ喋ると、弘志は自分の肩から雄二の手をそっとどかせ、くるりと振り向き信号を渡り始めた。背後で何やら雄二が何やら不満たらたらな声をあげているが、彼は気にしない。

雄二が暑がるうが辛がるうが、どうだっていいじゃないか、そんなこと。

当たり前のようにそう思うのが、滝川弘志という少年だった。

授業を退屈と感じる感性は、何も無関心少年弘志に限ったものではない。他の学生が皆全て、真面目に授業に取り組むというワケではないのだ。

現にこの教室でも、教師の熱弁を子守歌に居眠りをしている姿が弘志以外にもちらほらと見られた。その多くは、部活の朝練で疲労した者や、昨夜夜更かしをし過ぎた寝不足君である。

そうした生徒達に紛れてしまえば、弘志はごくごく普通の生徒であるように見られた。あくまで、紛れてしまえばの話だが……。

「滝川くん、滝川くん」

弘志が眠りの海に沈んでいると、突然耳元で囁き声が聞こえた。声の主は揺さぶられているのか、頭もぐらぐらと揺れている。

「もしもし。ねえ、起きた方がいいかもだよ」

無関心少年ならば、こうした善意の呼びかけは無視するに限るのだが、この時の弘志はそれ程睡眠に執着が無かったようので、だるそうに顔をあげるのだった。

「テストだっさ」

そういつて押しつけるようにプリントを手渡すのは、前の席の笠原美樹さきはらみきであった。クラスの学級委員でもある彼女は、世話焼きなことで有名だ。根暗な弘志にあれこれと世話を焼いてくれるのは、このクラスでは彼女や雄二くらいなものだった。

「そうかい」

そういつて無造作にプリントを受け取る弘志。アリガトウもスイマセンもなしである。美樹は呆れたような表情を作り、再び前に向き直った。

弘志の席は窓際最後尾。美樹はその前に座っている。窓際最後尾というのはなかなか快適な位置だ。居眠りしても気づかれにくいし、通気もいい。四方のうちの二方が壁になっているのも、落ち着きやすくして高評価だ。ことさら無関心少年弘志にとっては、打つつけの場所なのであった。

「十五分後の九時二十五分までとしますー。ハイでは始めてー」

教師の間延びした声を合図に、抜き打ちの小テストは始まる。一部生徒は怨嗟の声をあげていたが、テスト開始と共にその声も落ち着いた。シャーペンの走る音と紙のこすれる音以外、教室からはあらゆる音が消失する。

弘志はテスト用紙をぼんやりと眺めた。数学の小問が七、八個。先日授業で習ったばかりの範囲である。だが、授業をまるで聞いていない弘志にとってはチンプンカンプンな代物だ。

「……………」

弘志はとりあえず、そこに最低限名前を表記してから、シャーペ

ンを置いた。そして机に顔を伏せた。

十五分。短いようで長い時間だ。テストを受ける者にとっては丁度良い時間かもしれないが、それが終わるのを待つ者にすれば、何とも長く無味乾燥な時間だった。

ああ、どうでもいい。

テストもどうでもいいし、この待ち時間もどうでもいい。

世の中どうでもいいことだらけだ。と言うより、どうでもいいことしかないじゃないか。

何もかもつまらないし下らない。面白いことなんてどこにもない。誰も彼もが腐ってる。世の中は腐敗し疲弊している。本当に救いようのない世界だ。

さっさと滅びてしまえばいい。そうすれば、少しは面白くなるだろう。滅びる以外に価値のない世界。いつそのこともう一度世界大戦が起こればいい。

ああ、何という下らなさ、意味の無さ。

世界はどこまでも乾いた砂漠だ。

水も草木もない、ただの腐った大地。何も目にとまるものがない。何も面白いものがない。

だから、隕石でも落ちてくれればいい。

隕石が落ちてきて、世界を火の海にするのだ。そうすれば、味気のない砂漠も鮮やかに彩られるだろう。人々は最も新鮮な世界の光景を目の当たりにし、狂喜する。

誰も退屈だなんて思わなくなるだろう。そう、この自分でさえも。だから隕石よ、降り注ぐがいい。何なら地震でも噴火でもいいさ。災害が起こるなら何だっていいのだ。それは世界を刺激し、自分を刺激してくれる。

そしてその時初めて、自分は無関心の呪縛から解き放たれるのだ

「滝川弘志くん」

そこで、弘志は再び頭を揺すられた。どうやらどうでもいいこと

を考えているうちに、いつの間にか寝ていたようである。

顔をあげると、そこにはやはり笠原美樹の呆れ顔。おいおいまた寝てたのか滝川弘志くんよ、そんなことを言いたそうな表情だった。「プリント。一番後ろの人が集めるとさ」

弘志は黙って自分のプリントを美樹に差し出した。

「あたしじゃなくて滝川くんがやるんだってば。……って、名前以外全部白紙じゃない。テスト中ずっと寝てたワケ？」

弘志は答えず、手をひらひらと振って再び机に突っ伏した。

美樹は軽く舌打ちし、それからやれやれと溜息をついて、自らプリント回収に回った。前の席の生徒達はそれに関して何も言わない。またいつものことか、とでも思っているのだろう。

そう、いつものことだ。いつもいつも同じことの繰り返し。人間の行動はすぐに固定化されるからつまらない。

滝川弘志は思う。固定化は嫌だ。もっと刺激的なものが欲しい。

およそこの世に予想外という言葉程、心地の良いものはないのだ。全てが異常と非常に変わればいい。日常的世界は非日常的世界に変わればいい。何もかも、滅茶苦茶になってしまえばいい。

それが、無関心な少年の持つ唯一の願いだった。

少年がそう願ったのが原因なのかは不明だ。だがこの日、世界は彼の言葉通り、非日常の世界に飲み込まれることになる。

無関心少年はやがてそれを知るだろう。その時、彼は何を思うのだろうか？

この世に飽いた無関心少年が世界を救う。

これは、そんな物語だ。

1・悪魔

「まだまだ甘いな」

煙草をふかしながら“悪魔”が言った。

「遠慮し過ぎにも程があるぜ。なんだいこれは。俺が求めてんのはこんなんじゃない。もっと奥深くまで踏み込んでくれなきゃさあ」

その不満たらたらな声を聞いて、僕は溜息をつきながら言った。

「これ以上どうしろと言うんだよ」

悪魔は意地の悪い笑みを浮かべてそれに答える。

「無関心さが足りないんだよ。中途半端過ぎるんだ。滝川弘志はもつともつと物事に無感動でなきゃいけない」

「充分無感動無関心だと思っけどなあ」

そう言いながら僕はノートパソコンに目を向ける。そこには、ついさつき書き終えたばかりのテキストファイルが表示されている。

表題「無関心な少年」。わざわざ紹介するのも恥ずかしいが、自作小説の類だ。

「これが充分？ 糞かお前は。そもそも滝川弘志がクラスメートと普通に会話をしている時点で、おかしいとは思えないのか？ 本当に無関心な奴はな、他人とコミュニケーションなんかとらねえんだよ」

「そりゃあそうかもしれないけど……」

これだから最近の若い奴は、などと、悪魔は僕の後ろで年寄り臭い愚痴を垂れている。まあいつものことだ。無視して僕はPC画面のテキストに目を戻した。

無関心な少年。お世辞にも上手いとは言えないその文章の冒頭は、何やら謎めいた会話から始まっている（つもりだ）。世界が滅びると主張する大男に、そんなことはどうでもいいと言いつつ少年。後に描くであろう重要シーンを、プロローグとして最初に持って来ているワケだ。

それも四、五行で終わり、直後に本編がスタートする。学校に通う学生達の、教育に対する無関心さをさり気無く描写しつつ、主人公である滝川弘志を登場させる。メガネをかけた小柄な少年が主人公であるのは何とも地味な話だが、そもそもストーリーのコンセプトは「無関心な少年が世界を救う」であるから、主人公が多少地味でも問題はないだろう。

その後弘志の友人である樋川雄二を登場させたり、彼の自転車が壊されたという伏線的な小話を差し挟みつつ、物語はいかにも淡々と進んでいく。非日常系物語ではこういう日常的なシーンが重要だという話だから、とりあえず取り入れてみたワケである。

学校ではメインヒロインである笠原美樹を登場させ、滝川弘志の病的な脳内を描写した。世界が滅びればいいなどといった物騒な表現を交えつつ、彼がいかに無関心で偏屈な考えの持ち主であるかをよく分かるように書いたつもりである。

しかし悪魔はそこが特に気に入らなかったようだ。奴は憤懣やるかたない様子で僕にこう言った。

「世界の滅亡を夢見る弘志なんて、弘志じゃねえだろうよ」

「どつという弘志が弘志かなんて、君に分かるのかい？」

「当たり前だろうが」

悪魔は呆れ顔を作る。

「いいか？ 弘志は無関心少年なんだ。冒頭でも書いてるだろ、極端に無関心な少年がいた、ってな。だから弘志は極端に無関心な考え方をしなきゃいけないえワケよ」

それは自分でも分かっている。滝川弘志は無関心的な思考を持つ少年。そういう人物として僕も書いているつもりだ。

そう言っつてやると、悪魔はゆるゆると首を振った。

「いいやお前は分かっつてねえ。弘志という人間のあり方をわかってねえし、そもそも無関心というものを全く理解していない」

「君は理解しているのかい？」

「勿論だ。理解を通り越して悟っつてすらいる。俺が悪魔という身分

に生まれていなければ、無関心をテーマにした宗教を作っていたところだぜ」

自己満足に始まり一人相撲に終わりそうな宗教だ。無関心をテーマにしていると、一体どんな活動をするつもりでいるのだろうか？

「んなことはどうでもいい。問題はお前が作ってしまった“誤った弘志像”だ。無関心少年である筈の弘志が、その性格的役割を果たしていないんだよ」

「性格的役割？」

「弘志は無関心的でなければならぬ。にも拘らず、お前の描く弘志は明らかに関心的だ。この時点で既にテーマから逸脱している。ハードボイルド小説の中で主人公が絶叫するようなものだけ、これは」

たとえばよく分からないが、とりあえず相槌を打っておく。

「いいか、完全な無関心つてのは全てに対し淡泊でなければならぬんだ。然るにこの弘志はなんだ？ 世界が滅亡することに大層な関心を抱いてしまっているじゃないか。お前はこの描写によって弘志の異常性を表現した気になっているらしいが、これじゃあ本末転倒だ。弘志の異常性はあくまで無関心によっていなければいかん。関心に結びついた狂気はご法度だ」

そういうものなのだろうか。悪魔は何やら熱弁をしてくれているが、僕には今一つ無関心というものが理解出来ていない。というよりそれほど関心が持てないのだろうか。僕は無関心に対して無関心なのだ。関心を持つているのはこの悪魔の方である。

この悪魔が僕にとり憑いて、「無関心をテーマにした小説を書け。書かなければ孫の代まで呪うぞ」などと言い出さなければ、僕だって小説を書きはしなかつただろう。そもそも僕は文系じゃないのだ。文章を書くのには全くなれていない。小説だって殆ど読みはしない。

そんな僕が、何故小説などというものを書かなければならないのだろうか？ 誰に見せるワケでもなければ、どこかの賞に応募するワケでもない、ただ悪魔に頼まれただけだ。そんな理由で僕が小説を

書かされるのは、酷く理不尽なことに思えた。

悪魔の話では、僕の祖父（曾祖父だったか？）は大層な小説家だったらしい。「無関心」をテーマにした傑作を幾つも産み出したと聞いています。孫である僕自身はそれに関して初耳なので、正直眉唾ものであると思うのだが、悪魔は絶対的な事実であると強く主張している。

「お前の祖父は大した無関心作家だった。そしてその息子も中々文才溢れる人物だった。息子は惜しいことに今はもう亡き者だが、お前はその血を確かに受け継いでいる。だからお前にも書ける筈だ、無関心な物語を。俺にもう一度あの感動を味あわせてくれ」

この話が事実だとすると、祖父はどうやらこの悪魔に大層な無関心物語を披露してあげたらしい。それに悪魔は深い感銘を受け、孫である僕の前にもこうして現れたというワケである。迷惑この上ない話だった。

呪われては困るので、僕も嫌々ながら小説を書き始めているが、正直自分に文才があるとは到底思えない。父に才能があったというのも初耳だし、悪魔の話がどこまで本当なのか、はっきりいって想像がつかない。悪魔は僕を誰か別の人と間違えているのではないだろうか？ そう考えたことも何度かあったくらいだ。

だがそう考える度に、悪魔はこう言って僕を黙らせた。

「いいや、間違いねえ。お前は確かに源造げんぞうさんの孫だ。見た目、声質共にそっくりだからな。特にその獰猛なケモノの様に鋭い目つきは、源造さんのと瓜二つだぜ」

源造は確かに僕の祖父の名だ。漢字も間違いはない。そして奴の言う通り、祖父には獰猛なケモノの様な鋭い目があった。小さい頃その目がやたらと恐かったのをよく覚えている。そしてそれは息子である父、孫である僕にも受け継がれていた。お陰で僕は高校の頃、“鷹”という身不相応な勇ましいあだ名で呼ばれていたりする。

まあそれはともかく、遺伝的な特徴を挙げられては僕にも反論しようが無かった。鷹の子は鷹であり、その孫もまた鷹なのである。

やはり悪魔の言う“源造”は、僕の祖父である石川源造いしかわに間違いのないだろう。

だが遺伝的特徴を受け継いだのは、あくまで外見上だけの話だ。祖父にとてつもない文才があったとして、僕にそれがあるとは限らない。というか寧ろ、そんなものは僕にはないのだ。悪魔はそこら辺のことをどうにも理解していないようである。やれば出来る、お前は磨けば光る原石だ、などと無責任なことを言っているワケだ。「とにかく、リテイクだな」

悪魔はPCを指さして言った。尖った黒い指が、PCの画面を今にも突き刺すかのように伸びている。それは、僕が知っているいかなる地球上の生物の指にも、該当しないものだった。

「リテイク、か」

リテイク、すなわち書き直しのことだ。要は奴の言った通り、主人公滝川弘志をもつと無関心な少年にしなければならぬだろう。「ああ、果たしてこの物語は無事完成出来るのであろうか」

慨嘆するようにそう言ってから、僕はゆっくりと溜息をつき、テキストファイルの新規作成を実行した。

表題はどうしようか。まあ悩む程のものではない。とりあえず、「もつと無関心な少年」とでもしておこう。今度は悪魔様のお眼鏡にかなう作品が出来ることを、祈るばかりである。

悪魔がプカプカ煙をはいてる横で、僕は再び下手糞な文章を書き始めるのだった。

『もつと無関心な少年』

「お前はあくまで無関心を貫くというのか」

「……………」
少年は、何も答えない。

「空を見る、地球に危機が迫っているのは明白だろう。あの災厄を放置しておけば、地球は確実に粉々だ」

「……………」
少年は、やはり何も答えない。無表情に、地に視線を落としている。

大男は少年の肩をがしりと掴み、言った。

「地球を救えるのはお前だけだ。恐らく、お前以外にはいない」

「……………」
「それでもお前は、その危機に立ち向かおうとはしないのか？」

「……………」
少年は肯定も否定もしなかった。しかしそれはこの場合否定に他ならない。

男は手を放した。何となく、落胆したような様子だ。

「お前という男が分からない。地球が粉々になればお前とて無事じゃ済まないだろうに、どうしてそこまで無関心でいられるのだ？」

俺には異常としか思えないな」
異常と言われても、少年は気にも止めない。ただその色白の無表情な顔を、虚空に向けるだけだった。

大男は哀れむような目で少年を見据える。そして最後に言った。
「……………物事に関心を持ってぬ異常人よ。制限時刻は明日の正午だ。その時までにお前が無関心を脱出出来なければ、世界は滅亡する」
全ておしまいだ。大男は淡々とそう言い捨てて、その場を去っていった。

残された少年は、禍々しい血の色に染まった空を黙って見上げた。

どす黒い雲が渦を巻くように流れている。時折謎の咆哮が辺りに響きわたった。

ここはもう今までの平和な世界ではない。異常な世界だ。火山から噴き出した火山灰のように、世界に異常が蔓延したのだ。そして悪夢のような世界が誕生したのだ。

世界の凡人達は、この恐ろしい異常に適応出来るはずもなく、パニックを起こしていた。政府もこのような事態に対する対応策なんて持ち合わせてはいないので、頼りにならない。だから無垢な民衆は、ただひたすら戸惑い絶望するしかないのであった。

世界中の人々が恐怖していた。いや、中にはこの天変地異に「神の光臨」などの宗教的期待を抱いている者もいるだろう。しかしどちらにしても、世界中の人々がこの異常な状況に興味を抱き、大いに関心を持っていた。

そんな中、少年は空っぽだった。何も感じていなかった。無関心だった。どうでもいいと思っていた（あるいはどうでもいいとさえ思っていなかった）。それは、興味関心の塊となっているこの星の人間の中では、明らかに独特で奇特な存在であった。

異常人。少年をこう評した大男の言葉は、なるほど、もったもた言葉だった。

異常な世界に異常人が一人。果たして、この構図は何を意味しているのか。彼はこの異常な世界に狂わされた最初の犠牲者なのか、それとも、この異常な世界に遣わされた救世主なのか。

極端に無関心な少年が世界を救う。

この物語は、そこに行き着くまでの過程である。

朝。制服姿の学生達が学校に登校する中、少年滝川弘志は何故かよれよれのパジャマ姿だった。

持ち物はない、手ぶらだ。髪型は寝癖で芸術的な形を形成している。腫れぼったい顔には虚ろな表情浮かんでいた。何とも悲惨な容貌だ。

それでも眼鏡はかけていた。模範的なオタク君がかかるような、シンプルな丸眼鏡。指紋でベタベタになったレンズの奥には、光の宿らぬ瞳が二つ、無関心そうな視線を前方に向けていた。

少年は歩く。のろのろと、だらだらと、まるでゾンビのように。並木道を通り、坂道を登り、交差点を抜け、向かう先は彼の通う学校だ。パジャマ姿のこの少年は、現在学校への登校中なのだ。そんな少年に、周りの人々は好奇の目を向ける。まあ当然だ。パジャマで、寝癖で、眼鏡だ。誰だって不思議に思う容貌だろう。おまけに歩き方がゾンビとくれば、否が応でも目立ってしまうものがある。

周囲の視線を一身に浴びつつ、少年は無表情に道に行く。何も気にしていない様子だ。少しは羞恥心を感じてもいいだろうに、少年にはそういった感情はまるでないらしい。周りが自分に関して何を思おうと、それは彼らの勝手であり、自分には関係ない。全てはどうでもいいことなのだ。少年はそう思っていた。

少年は何事にも極度に無関心だった。この世のあらゆる事象は、彼にとって価値のないものだった。朝起きて、顔を洗って、服を着替えて、朝食をとって、そして行ってきますと家を出る、そんな当たり前の人生サイクルを、少年はどうでもいいの一言で否定していた。それは拒絶に近い否定でもあった。

だからこそ、少年はパジャマ姿だった。学校通うのに、わざわざ制服に着替える意味なんか無いだろうと、彼は考えているのだ。

寝癖に関しても同様だ。わざわざ髪をキメて格好つけて、一体何になるんだろう？ モテたいのか？ チャホヤされたいのか？ そんなことに果たして意味はあるのか？ などと、そういうことを考えている。だからこそ、彼の頭は酷く不潔な寝癖髪なのであった。

とにかく少年は無関心だった。ただでさえ昨今は、若者の人生へ

の関心の薄さが問題になっているワケだが、少年のそれはいささか度が過ぎていた。問題どころの話ではなく、既に異常の域まで達しているのだ。

人間は基本的に関心的動物である。物事に関心を持たずにはいられない。また、それを持たずには生きていけない。彼らの生活行動には必ず何がしかの関心的衝動が関わってくるのだ。だから、関心を全く持たないという人間は、この世にはいない筈なのだ。全てを失い自殺を考えている人間でさえ、死というものに対して関心を持っているのだから、これは当然と言えるだろう。ともかく、どんな人間も少なからず物事に関心を持つのだ。持たない人間など、いる筈がないのだ。

しかし少年はそれを持っていない。誰もが持つ筈の“関心”が少年には備わっていない。その代わりに“無関心”があった。少年は虚ろな生き物だった。彼は、物事に全く関心を抱かずに生活行動をとることが出来る、まことに奇異な存在だったのだ。

通常人を関心的人間とするならば、さしずめ彼は“無関心的人間”と言ったところか。世界広しと言えど、このような性格を持つ者は中々いないだろう。

少年は希少な生き物だった。

車がブレーキをかける音がする。それも急ブレーキだ。タイヤがパンクするんじゃないかというくらい凄い音をたてて、その軽トラツクは停止した。

「何やってんだこら！」

怒鳴り声が響き渡り、近くを歩いていた人々は何かと立ち止まって、その声のする方を見た。

「死にてえのかこの糞ガキ！ 寝ぼけて歩いてんじゃねえぞ！」

軽トラの窓から角刈り頭の中年男が身を乗り出して、何やら罵声を浴びせている。人々の視線はその中年男に集まり、次に罵声を浴びせられている人物の方へと移った。

「聞いてんのか!? さっさとそこどけこら! ひき殺すぞ!」

中年男に無関心そうな視線を向ける瞳が二つ。ボサボサの寝癖頭、そして水色のパジャマ。滝川弘志の姿がそこにあった。

弘志は無言のまま、怒鳴り散らしている男のこを見つめている。その表情には“どうでもいい”という感情がありありと浮かんでいた。

プー、プー。クラクションの音が絶え間なく鳴り響く。軽トラの後続車が、早くそこをどけと言っているのだ。

「おい、何でそこ停まってんだよ! 早く行けよ、後ろつまってんだろぅがバカ!」

「うっせえ! 俺に言うんじゃないよ、悪いのはこのガキだ。つかさつさとどけよてめえ! 何ぼおつとしてんだよ、ああ!?!」

それでも少年は動かない。魂が抜けたように、その場で硬直している。青白い痩せ細った顔だけが、小刻みに揺れながら、軽トラの主に向けられていた。

やがて信号が青になった。歩行者側の信号だ。つまりこれまで歩行者側の信号は赤だったことになる。そんな中、弘志少年は横断歩道を渡っていた。信号無視。それがこのクラクションの嵐の理由である。

人々が横断歩道を渡り始める。彼らは少年を奇異の目で見ていた。信号無視をして、軽トラにひかれそうになり、文句を言う軽トラの主を冷めた目で見つめ、その場で棒立ちし交通妨害をしている、パジャマ姿の少年。それは誰の目にも異常者のように映っていた。

少年がこの様な狂った真似をしているのは、やはりその無関心的性質に依るものなのだろう。しかし余人にはそんなの知る由もないことだ。少年がいわゆるデイタツチメント状態にあることに気付ける者は、この場にはいない。だから、皆が皆揃って少年を異常者だと思ひ、憐れみと蔑みを込めた目で眺めているのは、至極当然のことなのだ。

そこへ、車から下りた軽トラの主が近付いてきた。いつまでもど

かない弘志少年に業を煮やしたのだらう。鬼のような形相で、少年の胸倉を掴みあげた。

衆人はハッと息を呑んだ。殴る。殴るぞこの男は。頭に血がのぼった奴は、人を殴ることが罪に問われることを忘れがちだ。男は今も暴力事件を起こそうとしている。彼はこんな異常な少年に構った為に、犯罪者にされるかもしれないのだ。

「待ちなさい！」

とっさに一人の善良な男が叫んだ。

「殴つてはいけません！ 少年を殴つたとなつては、あなたの社会的立場は失墜します！ 更に言えば、彼は障害者です！ 障害者をいたぶつたとなつては、最早倫理の問題です！ 大衆は倫理の問題に関してのことさらうるさい。このままではあなたは、社会的弱者に暴力を振るつた悪者ということにされてしまいますぞ！！」

とても善良な男の発言とは思えなかつたが、少なくとも軽トラ主にはボディブローのように効いたようだ。主は冷や汗を浮かべ、少年から手を放した。

「あぶねえあぶねえ……。危うく人生を棒に振るところだったぜ。

感謝するぞその人。確かに大衆は恐ろしい」

「そうです。恐ろしいものなのです。ほら、周囲の人々をご覧下さい。皆こちらを注視しています。彼らは関心の塊なのです。ここであなたが暴力行為を致してしまえば、その関心は立ちどころに偽善的なものへと変わるでしょう。そうなればもう取り返しはつきません。関心的人間が欲するところは、すなわち他人の不幸なのですから」

雄弁に語りながら、善良な男は弘志の手を引き、横断歩道を渡る。信号は既に点滅している。立ち止まっていた衆人達もそれ気付き、慌てて横断歩道を渡り始めた。軽トラの主はペツと唾を吐き捨てて、トラックへ戻っていく。そして信号は赤になった。

トラックの主は車窓から善良な男に軽く会釈をし、それから弘志にギラリとした一瞥をくれると、車を発進させた。かくして交通の

流れは何事もなかったように再開される。

トラブルは終わった。衆人達はそう判断し、その場から離れていく。学生達は学校への登校という本来の目的に関心を戻し、サラリーマン達も自分が出勤中にあることを思い出し、それぞれ動きを再開する。

関心とは一時的で、移りゆくものなのだ。永遠に固定され続けることは滅多にない。

「やあキミ、大丈夫かね？」

善良な男が弘志に話しかける。二人は通行人の邪魔にならないように、歩道の端の方で肩を並べて立っていた。弘志は相変わらず無関心状態を維持させている。脱力したような姿勢で、その場に棒立ちだ。

「失礼なことを言つてすまなかつたね。障害者などと、軽々しく口にしてはいけないものだと言うことは、重々承知しているよ。勿論本気で言ったワケじゃない。あの場を切る抜けるための方便さ。私は人を説得するのが上手いからね、そういうつもりで言つたまでだよ。」

聞いてもいないのに、男はべらべらと喋り始める。弘志はあさつての方向を向いていた。わざわざ相槌をうつたりはしない。

「それにしてもキミは変わった人だねえ。赤信号を堂々と渡り、トラックにひかれそうになつたのに、涼しい顔をしている。おまけにあの強面こぼちが怒鳴りつけてきたのに。キミはいつでもよさそうな表情をしていた。これは中々普通のことじゃないよ。服装だつてそうだ。パジャマなんか着てたら衆人の視線を嫌というほど浴びるだろうに、キミは意にもかけずに歩いている。大した精神力だよ。一体どうしたらそんなに無関心でいられるのかな？」

関心の塊。どうやらこの男もその手の人間らしかった。恐らく火事などが起これば、消防車より先に野次馬に来るタイプだろう。そして同時に、ある程度の自己顕示欲も持っている。周りの人間達の注目を浴びたいのだ。そうでなければ、普通あのような状況で叫ん

だりはしないだろう。

彼もまた関心的な人間なのだ。それも、常人より少々高い程度の関心を持つ男だ。世界は広いから、こういうタイプの人間もそれほど珍しくはない。そのような男が偶々先のような状況に居合わせることもまた、それほど珍しいことではない。

一方弘志は男を無視して歩き始めていた。足の向きは学校の方角だ。男の話など耳にもいれず、ただただ目的地へ向けて、進む。

「待とうよ！」

“待つて”でも“待つんだ”でも“待ちなさい”でもなく、男はそう言つて弘志の肩を掴んだ。

「これをキミに渡しておく」

男は弘志の前に回りこみ、一枚の紙切れを差し出した。

精神研究家 飯田直晴 いいだなおはる TEL: ××× ××× ××××

名刺だった。いやに簡潔な名刺がそこにあつた。

「これは見てのとおり名刺だ。どうだ、白くて四角いだろう。ちなみにそこに書かれた名は私のものだ。飯田直晴。由来は私も知らんが、中々の名だと自負している。職業は精神研究家。文字通り、人の頭の中を研究しておる。最近の研究テーマは専ら人の“野心”に關してだ。どうして人は上を目指そうとするのか、何故人は昇りつめることに関心を抱くのか などということを、独自の理論を用いて説明している途中なワケなのだよ。そこで」

長広舌を披露しているうちに、弘志は先へ進んでいた。男は慌ててそれを追いかけて、

「もし何かあればここに電話をして欲しい。いや、何か無くても別に構わないんだ。とにかく電話をしてくれると嬉しい。私の研究対象に……いやいや、話相手になつてほしいのだよ。この歳になると中々友達が出来なくてね。まあ職のせいもあるのかもしれないが、とにかくそういうことだ。私はキミに興味をひかれたワケなのさ」

男は弘志のパジャマの胸ポケットに、強引に名刺を押し込んだ。「ヒマがあつたら電話をしてくれたまえ。いや、ヒマがないのだとしても、だ。そうしてくれないと寂しいからの。宜しく頼んだぞ、無関心少年君」

そう言つて弘志の方をポンツと叩くと、男はその場を去つていった。

周囲の人々はそんな男の後ろ姿をじろじろと見る。パジャマ姿の少年に語りかける謎の中年男にも、やはり彼らは興味を持つのだらう。芸術的な髪型に、いかにも研究者な白衣姿。何とも不思議な個性を持つ男だった。その辺は弘志にも引けを取らないかもしれない似たもの同士。そんな感想を衆人は抱いたようだった。

しかし、男と弘志はそれぞれ決定的に違う要素を持っている。それは、前者は関心的人間で、後者は無関心的人間であるということだ。

弘志は黙つて歩き始めた。胸ポケットには先程の名刺がしっかりと入っている。だが彼にとってそんなものはどうでもよかった。

今後、彼があの方に電話をかけることはないだろう。おそらく、絶対に。

うわ、来てるよアイツ。

アイツって？

あそこだよ。いるだろ、明らかに頭おかしい人。

あーあのパジャマくんね。何か久しぶりに見たな。最近見かけなかったから、てっきり死んだかと思つてた。

実際いつ死んでもおかしくないようなツラしてるしな。にしても久々だ。約十日ぶりか？ 何してたんだろ。

どっかの精神病院にでも入れられてたんじゃねえの？ 黄色い救急車が迎えに来たとか。

黄色い？ 何だそれ。

知らねえの？ 都市伝説だよ都市伝説。頭のおかしー奴んトコ来るんだよ。黄色い救急車がさ。

弘志が約十日（正確には八日間）学校を休んでいたのは、親戚の葬式に出席して居たからだ。当たり前だが、黄色い救急車が来たからではない。

今日は八日ぶりの登校となる。そのせいか周囲の生徒達の視線も、普段より一層関心的なものだった。

滝川弘志がこの高校に入学して三ヶ月。そろそろ周囲も彼の異邦人ぶりに慣れてきた頃だが、それでもまだ完全に慣れきったとは言えない。そして“完全なる慣れ”が訪れない限り、何らかのイレギュラーイベントの度に、彼らの関心は想起されるのだ。

八日ぶりに現れた異邦人に、関心人達の視線は集まる。弘志はそんな視線を意にもかけず歩いていく。玄関を抜け、靴箱を横切り、廊下を渡り、目指すは四階の教室1-4。彼は機械的に歩き続けた。まるで、あらかじめ頭にそうプログラムされてあるかのよう。

周囲の関心的十代達は彼を遠巻きに眺め、いかにも関心そうな様子だった。問題児の八日振りの登校は、彼らに何がしかの話の種を提供したようである。だが無関心的十代の弘志にはどうでもよいことだった。彼は周りの視線など気にかけないし、ひよっとするとそう言ったものの存在に気付いてすらいないのかもしれない。

やがて弘志は教室に至る。教室にはクラスメート達がいて、各々朝会前のささやかな交流に勤しんでいた。弘志は誰に声をかけることもなく、自分の席へまっしぐらと進む。そんな彼に、クラスメート達は特に関心を寄せていないようだった。入学から三ヶ月、流石に彼らも慣れたのだろう。滝川弘志がどういう人間で、彼にどういう態度をとればいいのか、その場の誰もが既に分かりきっているのだ。

彼らは弘志を無視していた。そして、当然のことながら、弘志も

彼らを見無視している。いつの間にか弘志とクラスメートの間には、互いに無関心でいようという暗黙の了解が成立していたのだ。

新学期の初めの頃は、まだ弘志にちょっかいをかけてくる者も多かった。なんせ世にも珍しいパジャマ姿の高校生だ。誰でも自然的な関心を寄せるだろう。ある者は弘志にパジャマ姿の所以ゆえんを尋ね、ある者は彼の傍でこそこそと陰口を囁き、ある者は彼を堂々と指差し馬鹿にした。

思えば軽い虐めのようなものだったかもしれない。だがそれは起こるべくして起こったことなのだ。精神的に未発達な高校生に、目の前の異常者を馬鹿にしてはならないと説いたところで、それを遵守する者はあまり多くない。勿論それは大人にだって言えることだ。関心を抱くなと言われたところで、そう簡単に制御出来る者はいない。何故なら彼らは関心的人間だからだ。関心するように生まれ、成長してきた生き物なのだから、そこにモラルや社会的マナーなどの常識論は、一切介在出来ないのである。

彼らが関心を抱くのは呼吸をするのと同様、当たり前のことなのだ。だが、もう一つ彼らには“当たり前”が備わっている。

それは“飽き”だった。関心尽きて飽き来たる。そして興味は流転する。誰しも同じものに永遠と興味を抱き続けることはない。勿論例外はあるだろう(“生きる”ということは、人間が生涯持ち続ける数少ない関心行為の一つだ)が、殆ど場合はそうなのだ。

だから、クラスメート達は次第に弘志から離れていった。つまり、ちょっかいをかけたのだとか、からかったりだとか、そういう行為をしなくなったのだ。

それは飽きが来たから。馬鹿にされても感情一つ見せない弘志がどうでもよくなったから。そして別のことに興味がわいたから。パジャマ姿の異常者に構っていたところで、青春は謳歌出来ないことを悟ったから。彼らは賢かったのだ、少なくとも人並みには。

だから彼らは弘志を見無視することにした。どうせこっちは見無視したところで、無関心少年弘志は気にしないだろうし、そうした方が

何だか理に適っているような気がしたからだ。

当然弘志は文句を言わない。ただあるがままに、無関心でいるだけだった。彼は、クラスメートが自分を無視していることにも気付いてないのだろう。

ともかくそうして現状は作られた。弘志がのっそりとした動きで席に着いた時も、彼らは何事もないように振る舞っていた。ある者は友人と談笑し、ある者はやり忘れた宿題をせっせと写し、ある者は机に顔を伏せてうとうととしている。それは本当に平和で青春的な光景だった。無関心少年弘志ですらも、その光景の一部となっていた。

やがてホームルームの始まる時刻がやってくる。14の担任教師が慌ただしく教室の戸を開け、入ってきた。

その中年の男性教員は、八日振りに登校したパジャマ姿の生徒をちらつと一瞥すると、すぐに目を逸らし、教卓に着いた。みんな静かにしろ、起立、着席！ テンプレート通りに朝礼を進めていく。彼もまた、他の生徒と同様弘志のことを無視していた。誠心込めた真摯な説教 制服を着てこいだとか、生活態度を改めるだとかに全く耳を貸そうとしない不良生徒に、彼も飽きてしまったのだろう。教師とてやはり人間なのだ。

淡々としたホームルームが終わり、入れ替わるように一時限目の数学の教師が入ってくる。眼鏡をかけた白髪混じりの男だ。彼は教卓の上にプリント類をどさんと乗せると、こちらもちらりと弘志を一瞥した。明らかに見る必要のない方向をぼんやりと眺めている、酷く不清潔ななりをした生徒。関わってはいけない。関わる意味は無いし、それをするにはデメリットが多すぎる。

数学教師はごく自然を装って弘志から視線を外し、やがて感情のこもらない無機質な声でこう言った。

「授業を始めます」

そしてそれはこの日五回に渡って繰り返されていくことになる。すなわち、二時限目、三時限目、間を略して六時限目。どの教師も

揃って弘志をちら見して、揃って目をそらしていく。それはまるで、前もって打ち合わせをしていたかのような揃いぶりだった。

こうして一日は過ぎていく。一般の生徒にとっては関心的に。滝川弘志にとっては無関心的に。それは、この青春の日常生活の中において、瑣末な違いに過ぎないことだった。

少なくとも、この時までには。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6789c/>

ディタッチメント

2010年10月10日04時04分発行